月例研究発表要旨

第265回　2013年6月26日
「ピアノ協奏曲の誕生」

小岩信治

19世紀は西洋音楽史における「ピアノの世紀」である。市民社会が成立し，産業革命を経たヨーロッパでは，新興中産階級のステイタス・シンボルの1つとしてピアノが普及した。ピアノが弾かれ，ピアノ譜が売られた。この世紀にピアノは，幾重もの技術革新を経て，今日のピアノ（「モダン・ピアノ」）に変貌する。現代のピアノ協奏曲のあり方は，この世紀の中葉以降に確立した。その前，たとえばショパン，ベートーヴェン，そしてモーツァルトのピアノ協奏曲は，今日の感覚からすれば，さまざまな点で「ピアノ協奏曲ではない」。拙著『ピアノ協奏曲の誕生 ――19世紀ヴィルトゥオーソ音楽史』はこの楽器について，その変貌に連動するオーケストラ，聴衆，そしてピアノ協奏曲というジャンルについての，「劇的ビフォー＆アフターの物語」である。

この変化を表すのが，現代では通常オーケストラと「モダン・ピアノ」で演奏される，有名なショパンのピアノ協奏曲である。かの時代には，それが数人（ショパンの場合ピアノとヴァイオリン2，ヴィオラ，チェロ，コントラバスの6人）で演奏できるよう楽譜が出版されていた。以下これを「室内楽版」と呼ぶ。「室内楽版」は，ピアノ協奏曲が広まるための重要な「メディア」であった。録音も放送もない当時，音楽が知られるためには演奏されなければならなかった。30人の管弦楽団は揃えられなくても数人で演奏できるなら聴く機会が拡がる。楽譜出版業者はこのような状況を見越していた。

ただ，「室内楽版」を単に「出版社の思惑の結果」と見なすと，ことの本質を見逃してしまう。「室内楽版」にはオーケストラ版にない魅力がある。弦楽器は1人1パートなので，各奏者に一定の自由がある。わずかだが即興の余地すらある。ショパンの協奏曲は19世紀の人々の前に，オーケストラ付きで聞くより「室内楽版」で近くで聞く時の方が，魅力的な姿を現していたとも言える。近年ショパン作品がしばしば「室内楽版」で演奏されるのは，現代の奏者にとってもこの演奏方法がおもしろいからだろう。

ショパン時代のピアノはベートーヴェンのピアノよりは現代のものに近づいているが，それでも「モダン・ピアノ」とは言えず，現在とは異なるピアノ文化の装いを伝えている。当時の楽器を使って「室内楽版」を演奏すると，ピアノが決して音楽を独占せず，弦楽器群に必死で戦いを挑むようなパワー・バランスになる（浜松市楽器博物館が所蔵する1830年のプレイエル・ピアノを使った録音を聴く。ピアノ独奏：小倉貴久子）。以上が本書第6章の要点である。

大変化の前にはそのような楽器だったピアノが，次第に「今日のピアノ」に近づき，リストの《ピアノ協奏曲第1番》のような，

パワフルなピアノと大人数のオーケストラが対峙する作品が可能になる。1855年のこの作品ではもはや「室内楽版」は販売されない。しかもほどなくしてスコアが出版された。指揮者を必要とし，弦楽器奏者が何プルトも必要なオーケストラ音楽としての「ピアノ協奏曲」の誕生である。(第10章)

こうした言わばハードの変化とともに重要なのは，コンサートという催しの変容である。BGM的に，人々が話している時でも演奏されていた音楽が，主に19世紀中葉以降，次第に静寂のなかで聴かれるようになった。「クラシック音楽」の聴き方の誕生である。そしてピアノ協奏曲は，そもそもは外連味指向の，ウケれば何でもありという性格だったのに，演奏会の変化とともに次第に「芸術音楽」として「傾聴」されることが目指される。フェーリクス・メンデルゾーンやローベルト・シューマン，クラーラ・シューマン夫妻は，静かに曲全体を聴くことで理解できる音楽を書いた(第5・7・8章)。さらに世紀終盤のヨハネス・ブラームス，カミーユ・サン-サーンスは，「聴く音楽」の延長に，「音楽の向こうに響く何か」を聴かせようとする（第11章)。前者の作品からはその一世紀前のモーツァルトの音楽が，後者の作品からはアフリカの音楽が聞こえてくる。ピアノ協奏曲は「鳴り響く博物館」(音の歴史博物館や民族博物館）の様相も帯びる。

今やピアノは，ベートーヴェンの頃とは違ってある程度「歌える」楽器となり，高音域も音がやや伸びるようになった。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーやセルゲイ・ラフマニノフの作品では，ピアノに息の長い旋律が与えられ，オーケストラの旋律と「歌い合う」。もっとも20世紀に入ると，そのような傾向の反動としてか，ピアノは旋律楽器ではなく打楽器として振る舞うようになる。バルトーク・ベーラの作品や，「のだめ」でも有名なモーリス・ラヴェルの《ピアノ協奏曲　ト調》は，そのような時代のピアノ協奏曲である。(第12章)

第266回　2013年11月20日
「語研特別例会（座談会)」

町田みどり

語学研究室（以下語研）開室50周年記念行事の一環として，語研の歩みを振り返ることにより今後の語研の展望につなげるという趣旨で，現室長である町田を司会とし座談会が開催された。座談会にご参加頂いたのは鈴木道彦先生，中村喜和先生，諏訪功先生，櫻井雅人先生，松永正義先生の5名である。座談会は，語研開室当時の状況，各先生の語研についての思い出，新学部構想，大綱化に伴う教養教育と組織における変化，語研についての要望というトピック順で進行された。以下，トピックごとに概要を記す（括弧内に，そのトピックについて中心的にお話いただいた先生のお名前を記す)。

〈語研開室前と開室後の状況〉

国内大学全体として，教員の研究室は未整備の状態であり，本学語学教員については，学部所属教員よりもさらに整備が遅れていた。しかし，1964年磯野研究館竣工と共に，語学教員の共同研究室として語学研究室が開室され，その後，個人研究室の配備が進められることとなった。また，語

研開室以前は，語学教員については個人研究費もなく，図書館における図書購入要請の便宜も図られていないという状況であったが，個人研究室の配備と同様に，開室後，随時状況改善がなされていった。（鈴木先生，中村先生談）

〈語研在籍中の思い出〉

分校主事を務められた諏訪先生を中心にキャンパス統合以前の小平分校における教育環境，図書館の整備等について各先生が思い出を語られた。小平キャンパスにおいては，教員全員が寄り集まる教員室がひとつあるのみであったため，小平キャンパスで授業を行う教員全員が，学部，専門領域を超えた交流を行うことが可能となっていたことが，先生方全員に共通した良い思い出として語られた。また，本学図書館については，文学部が不在にも関わらず，文学部でも見つかることのないような貴重な図書も収蔵されており，過去の語学教員の努力によるものであることが確認された。語学教員によるゼミの開講についての経緯も語られた。当初語学教員によるゼミ開講はなく，学生側からの強い要望によって，1961 年に鈴木先生のゼミが開講されたことが現在にいたる契機となっている。その後も「優秀な落ちこぼれ」と名付けられるような学生たちによって，ゼミは支えられてきたが，次第に学生気質もかわり，ゼミも変化を迎えている。

〈新学部構想について〉

キャンパス統合以前各学部に機械的に配属されていた語学教員は前期（1・2 年次）教育を担当する教員からなる組織体である前期教授協議会にも所属するという形であった。しかし，その組織体の権限には制限も大きかったため新学部設立の要望が高まった。1985 年の概算要求では新学部設立の予算要求もなされたが，要求は認められなかった。しかし，その後全学的委員会として「新学部設立準備委員会」が発足し，設立準備のための概算要求は継続して提出され，分校主事および各学部研究科長による文部省への説明・陳情も行われた。その後も予算要求はかなり長い間継続して行われたが，ついに新学部創設には至らなかった。（鈴木先生，諏訪先生談）

〈大綱化とその後の教養教育について〉

大綱化は教養教育の縮小という要求のもとに行われた実質上教養教育の解体であり，理念を欠いたものであった。短い準備期間で進められたため，教養教育全体について体系的な構想をすることが困難な状況であった上，各エリア間の要求のすりあわせもまた難航した。そういった制約の中，言語文化科目は，体系的な積み上げ学習を可能にすることを念頭において構想されたものである。現時点においては，講師不足で継続開講不可能な科目もあり，非常勤講師削減という大学側の要請，学生の気質の変化，また現在の研究動向の実情との矛盾もあって，全体として再検討の時期が訪れていることが確認された。（松永先生，町田談）

〈大綱化以降の組織の変化，人事手続きの現状について〉

新学部設立には至らなかったが，言語社会研究科という大学院が設立され，語研に所属する教員の半数弱が所属している。人事については 1969 年より前期連合教授会によって実質的人事が行われ，その後各学

部教授会で承認されるという形がとられていた。キャンパス統合後は，「人事会議」において共通教育担当教員の実質的人事を行っていた時期もあったが，現在ではより手続きが複雑化しており，人事が滞ったままというケースも見られるような困難な状況にある。（松永先生，町田談）

〈語研の今後にむけての要望〉

各先生から語研の未来に向けての要望が語られた。語研には，さまざまな語種の教員の所属という利点があり，それを活かして，領域横断的な研究の取り組みや例会を開催するといった研究活動が要望された。また，現在の社会状況に鑑み教養教育の再構築への取り組み，HP を利用した学内外に向けての情報発信への取り組み，またその一環として例会についてオーディエンスの拡大を目指す等の要望があげられた。

およそ 3 時間以上にわたる長い座談会となったが，各先生方による語研の歩みの活写に聴衆一同聞き入り，語研という組織のもつ魅力，その潜在能力をあらためて認識することができた。

第 267 回　2013 年 12 月 18 日
「上海モダニズムをどう読むか」

鈴木将久

報告者はこれまで 20 世紀前半に植民都市上海で花開いたモダニズム文学について研究してきた。

上海というと，日本では「魔都」，欧米では「冒険家の楽園」と言われるように，享楽的な都市文化の側面がよく知られている。たしかに，上海は開港都市として，西洋との貿易によって発達した都市であり，享楽的な商業文化が栄えていた。中国人作家にとっても，西洋の先進文化は，あこがれの的であった。また商業文化を背景として，出版社が中国でもっとも集中的に存在した都市でもあり，多くの文学者が集っていた。

しかし本報告では，上海文化の先進的な側面に目を向けるのではなく，西洋の先進文化に向き合った中国人作家のアンビバレントな心情に重点をおいた。上海の西洋文化は，イギリスをはじめとする西洋列強が行政権を握る「租界」というエリアにおいて栄えた。つまり中国人作家から見ると，あこがれの西洋文化は，自らが行政に参与できない植民地状況を同時に意味していた。上海の中国人作家がモダニズム文学を試みることは，単に西洋のすぐれた文学活動を学ぶという意味ではなく，自らが置かれたコロニアルな状況に対する問いを常に喚起するものだった。

以下では，そのようなコロニアルな状況との知的な格闘を代表した 3 人の文学者の活動を紹介した。

第 1 は魯迅である。魯迅は北京で作家活動をはじめたが，晩年は上海で雑文と呼ばれる独特な文章を発表しつづけた。雑文とは時事的話題を題材とするエッセイ風の批評文である。しかし魯迅の雑文は，時事評論に留まらず，一種の文明批評にまで達していた。中国の事件を語りながら，つねに西洋文化との非対称性を意識しつつ，非対称的状況の中で中国人としてどのような選択をするべきかを問い続けた。魯迅にとって西洋は，決して否定すべき対象ではない。しかし西洋にこびを売る中国知識人に対しては，容赦ない批判を浴びせる。西洋との

アンビバレントな関係を表象するがゆえに，魯迅の文章は，表面的には論理が見えにくい難解なものになる。その裏にあるのは，西洋的な価値観を自分自身のものとしていかに手に入れるかを課題とする思想的格闘だと思われる。本報告では，そのような魯迅の態度が鮮明に現れている雑文「持ってくる主義」を紹介しながら，魯迅的な文のあり方を論じた。

第2の文学者として，魯迅とは対照的に，西洋モダニズムを模倣した穆時英をあげた。穆時英は1930年代上海で，まだ20歳代の若手小説家として一世を風靡した。ダンスホールなど都市の商業文化を題材として，映画の影響を受けつつ，実験的な文体を駆使して，当時の文壇においては清新な小説作品を多数発表した。横光利一の影響を受けたとも言われ，中国新感覚派と呼ばれる。穆時英の小説に特徴的なのは，現実の重さを徹底的に排除し，言語の反復を運動として発動しようとすることである。その姿勢は，狭い意味では，当時中国文壇で強い力を持っていた左翼文学者への対抗であったが，より広い視野から見ると，西洋モダニズムの露悪的な反復によって，中国モダニズムの根無し的状況を，逆説的に表象しているようにも思われる。本報告では，彼の代表作の一つである小説「上海のフォックストロット」の一節を紹介した。

じつは穆時英は，1940年代に日本占領下の上海に戻り，テロによって暗殺された。テロ事件の真相については諸説あるが，明確なのは，モダニズム文学が「政治」と関わらざるを得なかったことである。上海モダニズムは，もともと西洋文化との交渉を内包していたが，1930年代末からは，日本の侵略という，より直接的な脅威にさらされた。そのことを最も明確に示した事例として，第3に陶晶孫の活動を紹介した。

陶晶孫は日本留学経験があり，日本時代からロマン主義を掲げて文学創作を行っていた文学者である。彼は1940年代に，日本占領下の上海に留まり，日本の文化機関と微妙な関係を結びながら，表面的には日本に従いつつ，文学のレベルで多層的な意味を込めた活動を展開した。本報告では，彼が日本語で書いた随筆「留守番日記」を紹介しながら，独特の微妙な政治性を駆使したテクスト戦略を読み解いた。

以上の事例から，上海モダニズムの実践と苦悩を，立体的に紹介することを試みた。

第268回　2014年2月19日
「『ジェンダーと「自由」── 理論，リベラリズム，クィア』合評会」

早坂　静

2013年3月に彩流社より刊行された『ジェンダーと「自由」── 理論，リベラリズム，クィア』の合評会が，2009年の『ジェンダーから世界を読むⅡ』合評会，2011年の『ジェンダー表象の政治学 ── ネーション，階級，植民地』合評会に倣って開催された。評者には大田信良先生（東京学芸大学）と戸谷陽子先生（お茶の水女子大学）をお迎えした。本書は，「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラム」基幹科目群の総合科目「ジェンダーから世界を読む」のリレー講義の内容をもとにして執筆，刊行された『ジェンダーから世界を読むⅡ』（2008年），『ジェンダー表象の政治学 ── ネーション，階級，植民地』（2010年）の後続である。

『ジェンダーと自由』の編著者の代表でいらっしゃった三浦玲一先生が病気療養中のところ2013年10月にご逝去されたため，この合評会は本著の編集に熱心に取り組んで下さった三浦先生のご逝去を悼み，先生を偲ぶ場となった。会の初めに，司会を務めて下さった小関武史先生の呼びかけにより，三浦先生のご冥福を祈り，黙禱が捧げられた。

編者として著者よりまず，刊行までの経緯，編集方針等の説明を行なった。初めの本書構想の段階で，三浦先生より執筆者の先生方に，それぞれのご専門の文脈の中で，ジェンダーとリベラリズムについて論じて頂きたいと依頼があった。その背景には，三浦先生は5年程前からアメリカのリベラリズムの文化をマルクス主義の見地から再検討する研究に取り組まれており，執筆者の先生方の多くも近年はリベラリズムと英米文学との関わりについて研究していたということがあった。執筆者の皆さまにはご自身の専門分野で全力投球してご執筆して頂き，その結果，多角的な視点から多様な文脈上のリベラリズムとジェンダーの再検討，再評価がされ，本全体が大変刺激的で読みごたえのあるものになった。また，『ジェンダー表象の政治学』を踏襲して，本書は論文集としての学術的レヴェルを保ちつつ，幅広い読者に読んで頂けるように平明に書かれた教養書的性格のある本であることを目指した。先の2冊の編著をご担当された中野知律先生，越智博美先生，中井亜佐子先生，吉野由利先生から編集のノウハウや流れについてご教示頂き，多大なお力添えを頂いたお蔭で，三浦先生がご病気に臥されても，本の刊行が滞ることなくできたことに心より御礼を申し上げた。

評者の大田先生には英米文学とリベラリズムとの関わりについて研究を重ねられている観点から，本書に細やかな論評を頂いた。特に，三浦先生が論文の中の「これからのフェミニズムにおいては，女の労働を考え直し，再定義し，新しい社会構造を考える必要がある」という提議の重要性を大田先生は認められ，高く評価された。さらに，本書に収められた論文のほとんどが，現在のフェミニズムならびに文化・教育研究の，あるいは個人の意識または精神のアンチノミーに焦点を合わせていることを指摘され，それらのアンチノミーを突き詰めたところに何か新しいものが生まれるのであろうと述べられた。次に戸谷先生より，舞台芸術論，アメリカ文学ご専門の見地から示唆に富んだご意見を頂戴した。初めに，本書に収録された論文が皆，ポジショナリティが鮮明であるとの総評を頂いた。次にポストフェミニズムの文化的転回は，ネオリベラリズムの個人主義，私探しの文化にフェミニズムが侵食されていることの表れであるという三浦先生の論文の指摘には納得させられたと述べられた。また，三浦先生の論文を受けて，60年代の新左翼的革命後，革命の闘士だった男性の多くが企業戦士へと転じたのと同様に，フェミニストの女性たちも男の文化を継承し，パワーへの志向を強めたのではないかという思いを持たれたということだった。続いて越智先生の論文にも言及され，冷戦期に抑圧された男性性が個人の性の解放へと向かい，それが今日のネオリベラリズムを準備することになったという議論は大変説得力があったと高く評価された。評の依頼をご快諾下さった大田先生と戸谷先生に改めて心より御礼申し上げます。

さらに，執筆者の先生方よりご意見を頂いた。越智先生には執筆にあたって三浦先生より，冷戦期米国の「消費する個人」としての男性主体の形成とマルクーゼの思想との関わりについて，示唆を受けたことに対する謝意を表された。同様に，町田みどり先生も執筆に際して三浦先生よりヘンリー・ジェイムズの小説のクィア批評を求められたことに言及され，お蔭で新たな研究領域の開拓に至ったとともに，読者の固定観念を解放してくれるクィア・リーディングに取り組むことによりご自身も解放されるような経験となったことに，謝辞を述べられた。井川ちとせ先生にも三浦先生より執筆の依頼を受けた際，先に刊行されていた井川先生の論文と前年度の講義のシラバスに事前に目を通されていた三浦先生が，本書に寄せて頂く論文の主旨についてご助言をされたことに，感謝の言葉を述べられた。また，学外よりご出席頂いた藤田淳志先生（愛知学院大学）も，推敲を重ねる中，三浦先生より受けたご助言に謝意を表された。中井先生は，昨今新自由主義を批判的に検討する際は，キャリア女性は批判の対象となることが多いが，組織の幹部に女性がいなければ女性の発言権は不在のままになるので，キャリア女性の存在は重要なのではないかという問いを呈された。さらに，中山徹先生には執筆後最初に提出された原稿は，三浦先生の編集上の配慮により，言語社会研究科の紀要『言語社会』第７巻の特集「マルクス主義批評の現在」の中の「理性使用の性的差異：『三ギニー』あるいはヴァージニア・ウルフ版「啓蒙とは何か」」として掲載されたことを明らかにされた。次に藤野先生より，三浦先生の発案による本書全体のテーマ構成を非常に面白く意義深いとして総評を頂いた。同時に，三浦先生の論文におけるネオリベラリズム批判の中で，今後のフェミニズムの発展のためには階級を超えた女の連帯が求められるという三浦先生の提案に疑義を示された。この問いには河野真太郎先生がお答えになり，第二波フェミニズムを「集団的」であったとする評価と，逆に「個人主義的」だったとする見方が今日混在しているが，三浦先生は前者の立場を取られ，ネオリベラリズムの下で失われた女の集団性を取り戻す必要があると述べられたのであろうと推察された。

本書の編集に関わらせて頂き，またこのような合評会を催して頂いたことにより，国内の研究を牽引されている執筆者の先生方の最新の知見に触れることができ，著者にとっては大変得難い経験となった。ここで改めて，町田先生はじめ語学研究室運営委員の先生方には，このような会を開催下さったことに，深く御礼を申し上げます。

本来ならば三浦先生が職場復帰された後にこの合評会は開催される予定でしたが，それがかなわずに三浦先生が他界されてしまい非常に残念でなりません。三浦先生には，本書の編集にお声掛け下さったこと，編集のために多大なご尽力を頂きましたことに心より感謝いたしております。

最後に重ねて，三浦玲一先生の御冥福を祈念申し上げます。